

業界短信

（22年7月1日～7月31日）

インスマタル、標茶CAD拠点増強（産業新聞、7/7）

㈱インスマタル（千葉県浦安市、福井英人社長）の北海道標茶CADセンターは、設立から1年強が経過し、順調な立ち上がりとなっている。浦安本社工場や八街工場と光通信網で結び、CAD（コンピュータ支援設計）を担当しており、将来は要因を六～八人に増強して、浦安本社工場や八街工場のCAD部門への人材供給拠点に育成していく考えだ。

石原商事、SS400規格材も在庫（鉄鋼新聞、7/7）

㈱石原商事（埼玉県蕨市、石原隆社長）は、「板厚公差マイナスゼロ指定鋼板」の常備アイテムに、新たにSS400規格材をラインアップする。新日本製鉄製で、8月ごろから在庫販売を開始する。板厚は6～19ミリで、主にタンクや鏡板、ベンディングロール材や各種プラント向けが対象。切板製品としての販売を手掛け、全国の小口・緊急ニーズに対応する。

青柳鋼材興業、船橋へ全面移管完了（鉄鋼新聞、7/8）

青柳鋼材興業㈱（千葉県船橋市、高橋雅雄社長）は、需要低迷に伴う受注量の落ち込みに対し、営業・生産体制を再構築した。生産小売アップとコスト合理化を図るため、浦安事業所で手掛けていた切板加工及び素材販売事業を船橋本社工場に全面移管したほか、100%出資の構内作業請負業「セイコー」の解散も決めた。主な需要分野のうち、建機・トラック関連は最悪期を脱したものの、橋梁や建築鉄骨、一般店売り向けはいまだに低調。この影響で受注量も、直近の最盛期に比べて約30%減っている。同社ではこの現象は一過性ではなく構造的変化と判断。浦安事業所お閉鎖、船橋本社工場への集約を決めた。船橋への集約作業はこのほど完了。新体制がスタートしている。

京葉ブランキング、受注増、設備能力拡充（鉄鋼新聞、7/14）

京葉ブランキング工業㈱（千葉県市原市、佐藤宣之社長）は、出力2KWレーザ切断機を増設した。建機・産機といった既存の需要分野が徐々に復調してきたことに加え、橋梁関連など新規分野でロットのまとまった受注が見込まれており、現在のレーザ切断能力では不足が生じると判断したためだ。納期を優先するために残業で対応していたこともあり、設備能力を強化することで現場作業者の労働環境改善を促す狙いもある。同社はガス、プラズマ、レーザ及び連続ブランキングによる厚中板の切断から各種2次加工、機械加工、溶接・組み立て及び塗装までの一貫体制を整えている。

北関東スチール、機械開先マシンを導入（鉄鋼新聞、7/21）

北関東スチール(株)（茨城県日立市、近藤剛司社長）は、このほど、機械開先マシンを導入した。同機はレーザー切断加工ラインが設置してある第3工場に設置。幅広の直線開先ニーズに、迅速・効率的に対応できるほか、レーザー加工→開先加工の工程を横持ちをかけずにスムーズに行える。同社は重電部材の厚板・極厚板加工が主体で、開先加工が付き物。一品一様の緩曲線開先が多いため、入手によるガス開先が主流だ。

北関東スチール、全員参加で「熱中症予防」（鉄鋼新聞、7/23）

7月は自治労が定めた安全衛生月間。労災撲滅だけでなく「快適職場づくり」も考慮した取り組みの推進を奨励する。北関東スチール(株)（茨城県日立市、近藤剛司社長）では、安全衛生月間にちなみ「単に高邁なお題目を唱えるだけでなく、どんな小さな事柄でもいいから、全員参加できる具体的な取り組みを実施しよう」との近藤社長の呼びかけのもと、今年は「熱中症予防」に決めた。工場内に2か所ある冷蔵庫と、もともと別会社が使用していた事務所の冷蔵庫に、水分補給のためのミネラル成分を含んだ低カロリー飲料と、手軽な塩分補給のための塩アメを常備。これをだれもが自由に飲み、なめられるようにしてある。また、現場に近い新事務所内は人のいる、いないにかかわらず、就業時間内は冷房をかけ、ゆったりと座れる椅子も用意。快適な休憩スペースとした。同社はガス溶断、サンダー・グラインダー掛け作業に従事する作業者が多く、真夏の熱波は熱中症の温床になりかねない。予防には休息と水分補給そして塩分補完が必要で、社員総意によるこの取り組みは7月1日から9月20日まで行われる。

6月の輸出船契約、2.5倍の159万総トン（鉄鋼新聞、7/27）

日本船舶輸出組合が発表した6月の輸出船の契約実績は前年同月比2.5倍の159万総トン（33隻）となり、リーマン・ショック後では月間で最高となった。同手持ち工事量は6月末時点で1022隻、4977万総トンと21カ月連続で減少し、06年10月以来となる5千万総トン割れとなった。契約した33隻のうち30隻がバラ積み船で、2隻が貨物船、1隻が輸送船だった。

韓国厚板、10-12月に輸出超過（産業新聞、7/27）

韓国のPOSCO経営研究所（POSRI）によると、2010年は厚板の輸出入バランスが下期にかけて大きく転換し、10-12月にも輸出超過に転じる。昨年来、東国製鋼、現代製鉄が新ミルを立ち上げたのに続き、下期はPOSCOが光陽製鉄所で新たに年産200万トンの新厚板ミルを立ち上げる。造船などの需要や為替などの動向により、当面はほぼ輸出入が均衡した状態が続くものの、11年4-6月以降は輸出超過が定着する可能性がある。